論　文　ニダバ (*Nidaba*) 35(2006), 85-94

日本語とマレー語における否定詞の上昇と否定の焦点

Zoraida MUSTAFA

1. はじめに

日本語の否定は、一般的に「ない」で言い表されている。一方、マレー語では、複数の否定詞が存在しているが、もっとも頻繁に用いられる否定詞は【tidak】と【bukan】である。日本語では、否定詞が動詞、形容詞、連結詞に後続し、述部を否定するのに対し、マレー語では否定詞が動詞、形容詞、名詞に先行する。以下は、その日本語とマレー語の否定詞の位置を示している例文である。

(1)　(私は)雨が降ると思わなかった。
　　(saya)hujan turun fikir-NEG

(1')　Saya tidak fikir hujan turun.
　　私　NEG 思う　雨　降る

しかし、日本語では (1) の他に、次の (2) のような文も考えられる。談話的・語用論的に見ると (2) は、文法的に正しい否定文である。

(2)　(私は)雨が　降らないと　思う。
　　(saya) hujan turun-NEG　fikir

(2')　Saya fikir hujan tidak turun.
　　私　思う　雨　NEG　降る

(2) では、否定詞が埋め込まれた文、「雨が降る」に現れ、「降る」という動詞を否定する。構文的に見ると、(1) は、否定詞が主節「(私)～思う [NEG]」に現れ、「思う」を否定しているが、内容的には「雨が降らない」と思ったことになり、(1) と (2) は同じ意味になると考えられる。

以上の現象は、否定詞の上昇と呼ばれ、英語の否定研究でよく取り上げられ、注目されている。また、日本語の否定研究の中で、McGloin(1972) と岩倉 (1974) の研究では、否定詞「ない」の上昇問題が取り上げられている。

一方、マレー語の研究では、Omar(1980)、Karim et al.(1993)、Fang・Hassan(1994)、Karim(1995) によれば、【tidak】は動詞、形容詞に先行し述部を否定し、【bukan】は名詞に先行すると述べられている。【bukan】は、動詞または形容詞を否定する場合はある

が、その際、特定のコンテクストが必要である。名詞句での【 bukan 】の使用は、先行する文と「対立」の意味を含む文に後続されなければならない。つまり、【 tidak 】の方がいわゆるネクサス否定に相当し、【 bukan 】はより幅広く、様々な文脈やコンテクストの中で使用されている否定詞である。

したがって、マレー語の【 tidak 】と【 bukan 】は、単純に日本語の「ない」に相当しない。しかし、Mustafa(2002)では、日本語とマレー語の否定表現を対照比較した中で、両言語の否定表現の用法に関して、いくつかの共通点が見られる。すなわち、日本語とマレー語は統語的に異なる言語であるが、否定表現に関しては、機能的に類似していることが示唆される。本稿は、日本語とマレー語における否定詞の上昇と否定の焦点について考察を行い、両言語の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

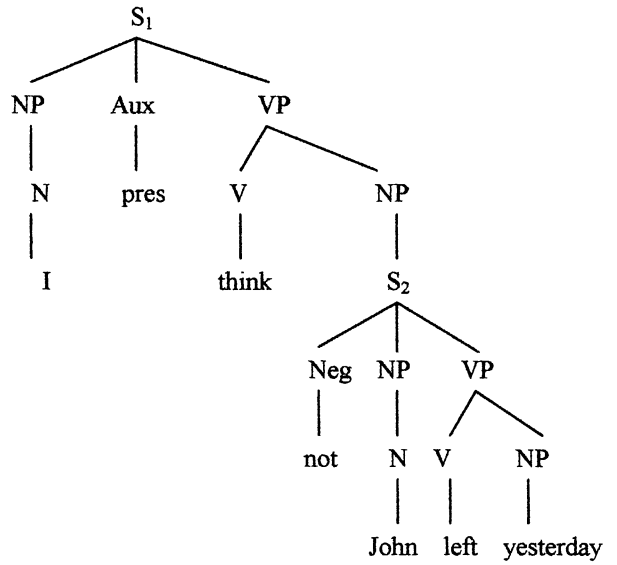
2. 日本語の否定詞の上昇と問題点

英語の否定研究では、否定詞の上昇について数多く議論されている。Horn(2001)では、文の基底構造の中で否定詞が低い節から高い節へ移動することによって、否定詞の上昇という現象が起こる。つまり、2つの文は同じ基底構造から派生され、同じ意味を成している。例えば、(3) のaとbは、同じ (3.T) の基底構造を持っている。

(3) a. I think John didn't leave yesterday.

b. I don't think John left yesterday.

(3.T)



岩倉(1974)によれば、上記した基底構造を用いて、(3) のaとbが同じ意味を表していることが説明できるが、同じ構造の [NP thinks[X-not-Y]$_S$ 型] と [NP do(es) not think [X-Y]$_S$型] をしている文でも、異なる意味を成している場合があり、そのとき上掲の基底構造の分析では説明できなくなる。そして、岩倉(1974)は、それまでの否定詞上昇の問題

点を挙げて、次の新たな分析法を提唱した。

OPT　X　V_{TH}　$[W[Neg]_{VP}]_S$　Y →

X　Neg　+　V_{TH}　$[W]_S$　Y

条件：W、X、Yは変数で、Xは、V_{TH}と同一単文内に、否定詞を含まない。

（岩倉　1974、p.221）

岩倉(1974)によれば、否定詞の上昇は、$[Neg]_{VP}$が示すように、動詞句に余すところなく支配されている否定詞（つまり文否定）に限定されている。また、否定詞の上昇は、think、suppose、believe、guess、expect、want、seem、appearなどを含む少数動詞にしか適応できないとし、これらの動詞を「思考動詞」(verbs of thinking(V_{TH}))と称している。

さらに、岩倉(1974)は、英語の[NP think(s)[X-not-Y]$_S$]、[NP do(es) not think [X-Y]$_S$]とその日本語対応文 [NP wa[X-Y-nai]$_S$ omou/omotteiru]、[NP wa [X-Y]$_S$ omowa nai/omotte inai]を考察した。その結果、岩倉(1974)の分析方法では、日本語における否定詞の上昇も否定詞が及ぶ範囲に関して、言語普遍的と思われる制約、すなわち、否定詞が及ぶ範囲は、基底構造で、その否定詞が現れる文の中だけであるという考えを用いて、説明することができると述べている。

また、McGloin(1972)は、日本語の埋め込み文の中で否定詞がある文では、否定詞が低い節から高い節に上昇することがあると述べている。しかし、否定詞の上昇を許す動詞と許さない動詞があり、上昇に当たっては小規則が必要であると主張している。つまり、「思う」「考える」のような一部の動詞が主節に使用される場合、埋め込み文の中から、否定詞がより高い節への上昇が許可される。

以上、岩倉（1974）とMcGloin（1972）は英語における否定詞の上昇の理論を用いて、日本語の否定詞の上昇を説明しているが、ここでは一つの問題点がある。それは、英語の「考える動詞」と日本語の「考える動詞」の間に意味的な差異があり、日本語では、英語のように全ての「考える動詞」が否定詞の上昇を許すわけではない。岩倉（1974）の分析では、動詞「思う」を中心に議論しており、日本語でも否定詞の上昇が可能であると結論づけているが、他の考える動詞を取り上げていなかった。つまり、日本語における否定詞の上昇に関しても、岩倉（1974）が提唱した分析法では、「思う」という「考える動詞」の場合が可能であるが、他の「考える動詞」に関しては明白になっていない。

次に、岩倉(1974)の分析法で、【tidak】と【bukan】を含む否定文を検証し、マレー語における否定詞の上昇を考察していく。

3.　マレー語における否定詞の上昇

3.1　マレー語の否定詞の移動

マレー語における否定詞の上昇問題へ進むために、まずは否定文内での【tidak】と

【 bukan 】の交替が可能かどうかを見てみよう。(4)a は、同じ否定文であるが，それぞれ【 tidak 】と【 bukan 】が用いられる文である。【 tidak 】と【 bukan 】は両方、述部[VP]を否定しているが、【 bukan 】を用いる場合は、相応の文脈が必要である。 また、(4)b～d は、【 tidak 】と【 bukan 】を文の中の同じ位置で交換してみると、次のようになる。

(4) a. Saya { tidak / bukan } pergi ke sekolah.
私　NEG　行く　へ　学校
〈私は学校へ行かない〉【 tidak 】
〈私は学校へ行くのではない〉【 bukan 】

b. { *Tidak / Bukan } saya pergi ke sekolah.
NEG　私　行く　へ　学校
*〈私（ではない）は学校へ行く〉【 tidak 】
〈学校へ行くのは私ではない〉【 bukan 】

c. Saya pergi { *tidak / bukan } ke sekolah.
私　行く　NEG　へ　学校
*〈私は学校へない行く〉【 tidak 】
〈私は学校へは行かない〉【 bukan 】

d. Saya pergi ke sekolah { *tidak. / bukan }
私　行く　へ　学校　NEG
*〈私は学校は行くない〉【 tidak 】
〈私は学校へ行くのではない〉【 bukan 】

(4) は、[NP][VP]の構文を持っているが、その中での否定詞の位置を定式化してみると、a～d のそれぞれのようになっている。

a. [NP][Neg-VP]
b. [Neg-NP][VP]
c. [NP][VP[V-Neg-Adv]]
d. [NP][VP[V-Adv]]Neg

一般的には、(4)bのような【tidak】の用法は、非文法的であるが、慣用表現として認められている場合がある[1)]。(4)bのように【bukan】が[NP][VP]に先行する場合は、[NP](saya「私」)に焦点が移り、「私は学校へ行かない(学校へ行くのは私ではない)」という日本語の対応文が考えられる。また、(4)cでは、【bukan】が、[VP]"pergi ke sekolah"「学校へ行く」の中に現われ、"pergi bukan ke sekolah"「*行く学校へではない」、すなわち「学校へは行かない」という意味を表し、"ke sekolah"「学校へ」が否定の焦点となる。(4)dの【bukan】の使用は、文脈によっては、談話の中で用いられることはある。ただし、【bukan】が文末に現れると、「確認」という用法で用いられ、「私は学校へ行ったじゃない?」のように、【bukan】に高いアクセントが置かれることが一般的である。

以上、否定平叙文では、否定詞【tidak】の移動は認可されないが、【bukan】は、[NP][VP]の前後、または[VP]の中で現れることが許される。つまり、【bukan】は、文内でいくつかの位置に置くことができるが、否定詞の位置によって、否定の領域と焦点が異なってくるため、それぞれの意味も異なってくる。

3.2 【tidak】と【bukan】の上昇

Mustafa(2002)では、次のような例文が見られた。

(5) a. Dia merasa kata-katanya itu **tidak** keras. (Juara)

彼は自分の言葉は厳しいと思わなかった。『闘牛士』

(5)aでは、マレー語の文の「厳しい」という語が否定されているのに対して、日本語の訳文はmerasa(思う)が否定されている。また、次の(8)のような文もある。

(6) a. Rusli **tidak** merasa perlu bersembunyi-sembunyi. (Seroja Masih Di kolam)

ルスリは,何もこそこそする必要はないと思った。『サロジャの花はまだ池に』

(6)aでは、マレー語の文に「思う」が否定されるのに対し、日本語の訳文は"perlu"「必要だ」が否定されている。上記の(5)aと(6)aの否定詞の位置を換えてみると、次の(5)bと(6)bが考えられる。

(5) b. Dia **tidak** merasa kata-katanya itu keras.

彼は自分の言葉は厳しいと思わなかった。

(6) b. Rusli merasa **tidak** perlu bersembunyi-sembunyi.

ルスリはこそこそする必要はないと思った。

以上のように、(5)aと(6)aは、(5)bと(6)bのように、否定詞【tidak】の位置を替えることができる。しかし、(5)bと(6)bは、否定詞の上昇によって派生される文であるとは、判断しにくい。"fikir"「考える」、"rasa"「感じる」のような動詞は、談話的なレベルでは、ある事柄について直接的に言う、または断言することを避けるためによく用いられる表現である。そのため、発話者の心的状態によって、どの部分を強調するか、または焦

点に置くかによって、否定詞をより早く、または遅く置くことも考えられる。以下の例文を参照。

(7) a.Saya *fikir* mereka **tidak** akan bersetuju dengan pendapat itu.

私　思う彼ら NEG（未来）賛成する　と　意見　その

〈私は彼らがその意見に賛成しないと思う〉

b. Saya **tidak** *fikir* mereka akan bersetuju dengan pendapat itu.

私 NEG 思う彼ら（未来）賛成すると　意見　その

〈私は彼らがその意見に賛成すると思わない〉

(7') a. Saya *fikir* mereka **bukan** akan bersetuju dengan pendapat itu.

私　思う彼ら NEG（未来）賛成すると　意見　その

〈私は彼らがその意見に賛成はしないと思う〉

b. Saya **bukan** *fikir* mereka akan bersetuju dengan pendapat itu.

私 NEG 思う彼ら（未来）賛成する　と　意見　その

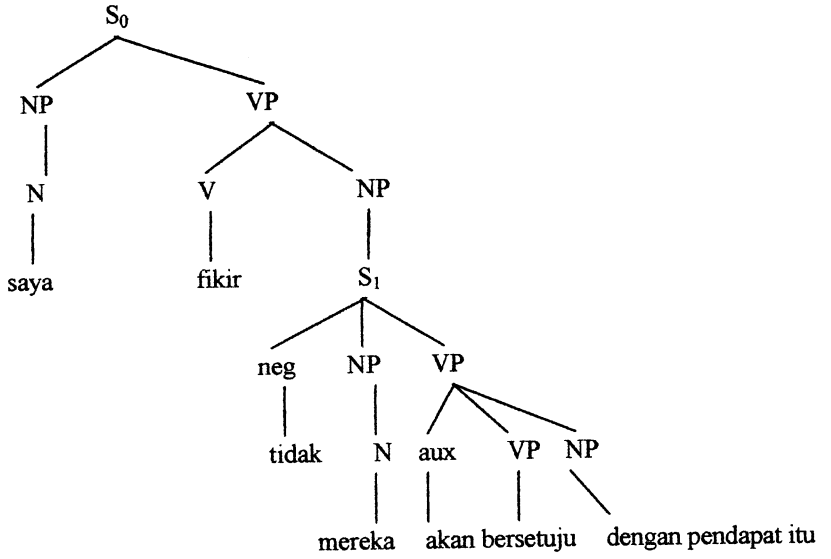
〈私は彼らがその意見に賛成することは思わない〉

(7)aは、埋め込み文が含まれているマレー語の文である。この文は、“ saya fikir ”「私は考える」と“ mereka tidak akan bersetuju dengan pendapat itu ”「彼らはその意見に賛成しない」という2つに分けて考えることができ、S[NP-VP[NP-Neg-VP]] という構文である。(7)bも、“ saya tidak fikir ”「私は考えない」と“ mereka akan bersetuju dengan pendapat itu ”「彼らはその意見に賛成する」というように考えられ、S[NP-Neg-VP[NP-VP]] の構文をしている。(7) のaとbを、岩倉(1974)が提唱した基底構造で分析してみると、次の7.T（次ページ）のようになる。

7.T により分析してみると、(7) のaとbが同じ基底構造を持っていることが証明でき、aとbは、同意文であることがわかる。では、(7') のaとbのように、【 bukan 】を用いる否定文も、(7) のaとbのように同じ基底構造から派生されると考えることができるだろうか。(7')aは、埋め込み文“ mereka bukan akan bersetuju dengan pendapat itu (sebaliknya)”「彼らはその意見に賛成しない（が、）」に対立概念が後続することが必須な条件である。【 bukan 】を用いる場合は、発話者と聞き手の間に何か話題の前提がなければならない。また、“ saya bukan fikir ”は、そのままでは主張できずに、何かの補足文が必要である。“ saya tidak fikir ”「私は考えない」という否定文を用いる場合は、発話者が「考えない」ということを断言することができるが、“ saya bukan fikir ”「私は考えない」が発話されると、聞き手には前提の話題がなければ、

談話的に会話が続かなくなることもある。つまり、(7') のaとbのような、【 bukan 】が用いられる否定文では、(7')bは、(7')aから派生し、否定詞【 bukan 】が上昇したものとは言えない。

7.T



さらに、以下の (8) と (9) では、主節に動詞“ rasa ”「感じる」と“ sangka ”「予期する」を用いる文の場合も、【 tidak 】の上昇を認可するかどうかを見てみよう。“ rasa ”または“ sangka ”の日本語訳では、それぞれ「思う」と「予期する」になっているが、マレー語では、「思う」というニュアンスで用いられることが一般的である。

(8) a. Saya *rasa* perkara ini tidak boleh diselesaikan di luar mahkamah.
私 感じる 件この NEG 可能 解決される 外 裁判
〈私はこの件が裁判のほかに解決できないと感じる〉

b. Saya tidak *rasa* perkara ini boleh diselesaikan di luar mahkamah.
私 NEG 感じる件 この可能 解決される 外 裁判
〈私はこの件が裁判のほかに解決できると感じない〉

(9) a. Saya *sangka* dia tidak akan menolak lamaran pemuda itu.
私 予期する 彼女 NEG (未来) 断る プロポーズ 男 その
〈私は彼女がその男のプロポーズを断らないと予期する〉

b. Saya tidak *sangka* dia akan menolak lamaran pemuda itu.
私 NEG 予期する 彼女 (未来) 断る プロポーズ 男 その
〈私は彼女がその男のプロポーズを断わると予期しない〉

上記の (8)a は、「この件は裁判のほかに解決できないと感じる」ことを意味している。(8)b は、「この件は裁判のほかに解決できると感じない」ことを表しており、「裁判のほかに解決できない」というように感じていることとして理解することもできる。したがって、(8)a と (8)b は同じ意味を表す文である。また、(9)a は、「彼女がその男のプロポーズを受けるだろう」ということを予期しているため、否定文で「断らない」と予期すると言

っている。(9)bでは、「彼女がその男のプロポーズを断ると予期しない」ことは、「彼女はその男のプロポーズを受けるだろう」ということを予期する。したがって、(9) のaとbは、「彼女はその男のプロポーズを受けるだろう」と予期していることになり、bはaから派生し、否定詞が低い節から高い節へ上昇したものと考えられる。

しかし、以下の(10)では、“ harap ”「期待する」という動詞を、(8) の“ rasa ”「感じる」と入れ替えてみると、【tidak】が低い節にある場合と高い節にある場合、従属節の意味が微妙に異なってくる。“ harap ”「期待する」も、マレー語では“ fikir ”「考える」、“ rasa ”「思う」、“ sangka ”「予期する」のような「考え」を表す動詞である。

(10) a. Saya *harap* perkara ini tidak boleh diselesaikan di luar mahkamah.
私 期待する 件 この NEG 可能 解決される 外 裁判
〈私はこの件が裁判のほかに解決できないと期待する〉

b. Saya tidak *harap* perkara ini boleh diselesaikan di luar mahkamah.
私 NEG 期待する 件この可能 解決される 外 裁判
〈私はこの件が裁判のほかに解決できると期待しない〉

(10)a では、「事件が裁判のほかに解決できることを期待している」のに対し、(10)bでは、「事件が裁判のほかに解決できることを期待しない」という意味になる。すなわち、(10)b では、「本当は裁判に持ち込まないで解決してほしかった」が、「そううまくいかないこともある」から、「裁判のほかに解決できる」ことを期待しない。一方、(10)a では、そもそも「裁判以外で解決してほしくない」という考えがあり、「裁判のほかに解決できない」ことを期待するという意味になる。したがって、(10)b は、(10)a から否定詞が上昇したということは言えない。

次に、“ harap ”「期待する」を“ kata ”「言う」に換えてみると、次の(11)のようになる。

(11) a. Saya *kata* perkara ini tidak boleh diselesaikan di luar mahkamah.
私 言う 件 この NEG 可能 解決される 外 裁判
〈私はこの件が裁判のほかに解決できないと言う〉

b. Saya tidak *kata* perkara ini boleh diselesaikan di luar mahkamah.
私 NEG 言う 件 この 可能 解決される 外 裁判
〈私はこの件が裁判のほかに解決できると言わない〉

(11)a と(11) bの意味は微妙に異なる文である。(11)a は、「この件は裁判のほかに解決できない」ということを「言った」が、(11)b は、「この件は裁判のほかに解決できる」ということは「言わなかった」という意味的に微妙な違いを表している。(11)a は、事実として「この件は裁判で解決できない」ということを言った。(11) bは、事実として「この件は裁判で解決できる」ということを「言わなかった」としても、それは「この件は裁判で解決できない」という意味にはならないだろう。したがって、“ kata ”「言う」

も、“ harap ”「期待する」と同様に、低い節から高い節への否定詞の上昇を認可しない動詞である。

以上の (7) ～(11) を見ると、マレー語における否定詞の上昇について次のようにまとめることができる。

ｉ) 否定詞の上昇は【 tidak 】を用いる否定文の中にだけ起こり得る

ii) “ fikir ”「考える」、“ rasa ”「思う」、“ sangka ”「予期する」のような「考える動詞」が主節に現れる場合は、【 tidak 】は従属節から主節に上昇することが考えられる

iii)「考える動詞」の“ harap ”「期待する」は、【 tidak 】の上昇を認可しない

iv) “ kata ”「言う」のような「考える動詞」以外の動詞は、否定詞の上昇を認可しない

ｖ)【 bukan 】が用いられる文では、平叙文でも位置が自由に換えられ、否定の焦点を移すことができるため、否定詞の上昇という考え方に当てはまらない

したがって、マレー語では、“ fikir ”「考える」、“ rasa ”「思う」、“ sangka ”「予期する」という「考える動詞」との関わりで否定詞が上昇する場合は、英語または日本語で議論されている否定詞の上昇現象と同様に考えられるが、“ harap ”「期待する」のような「考える動詞」との関わりで行われる否定文の場合は、否定詞の上昇として判断しにくい場合がある。

4. 結論

本稿は、日本語の否定詞の上昇という研究見解を利用して、マレー語における否定詞の上昇を調べた。その結果、マレー語の否定詞の上昇は、日本語の否定詞の上昇と同様ではないが、【 tidak 】は、用いられる埋め込み文の中から、より高い節への上昇があると考えられる。本稿では、「考える動詞」として考えられる動詞をいくつか挙げて分析してみた。“ fikir ”「考える」、“ rasa ”「思う」、“ sangka ”「予期する」の「考える動詞」が主節に使用される場合は、【 tidak 】の上昇が認められるが、“ harap ”「期待する」、“ kata ”「言う」の様な動詞は、【 tidak 】の位置を換えると、文の意味が微妙に異なり、否定詞の上昇として認めにくいこともある。また、【 bukan 】を用いる否定文の場合は、談話的・語用論的に意味が異なってくるため、否定詞の上昇として認められない。さらに、【 bukan 】は、否定文における用法と位置が様々であるが、否定詞の上昇というより、否定の焦点との関わりでその位置が決められるという考え方の方が適当である。

以上のマレー語に関する否定詞の上昇の結果を日本語の否定詞上昇と対照してみると、形式的な面では、両言語は鏡のような関係を持っているということが言える。つまり、日本語の否定詞の上昇は、従属節から主節へ移動するため、否定詞が遅く出現することにな

る。一方、マレー語の否定詞の上昇は、否定詞が従属節から主節に上昇するため、より早く現れることになる。また、マレー語にも日本語のように「考える動詞」としている語の中でも、否定詞の上昇を認可しない動詞がある。

注

1) マレー語の“ pantun ”の中では、【 tidak 】が文頭に現れることがある。

参考文献

Horn, L. R (2001) *A Natural History of Negation* CSLI Publication

岩倉国浩（1974）『日英の否定研究』 研究社

Karim, Nik Safiah (1995) *Malay Grammar for Academics and Professionals* Dewan Bahasa & Pustaka

Karim, Nik Safiah et al. (1996) *Tatabahasa Dewan*（マレー語国語文法） Dewan Bahasa & Pustaka

McGloin, N. H (1972) *Some Aspects of Negation in Japanese* Ann Arbor, Michigan, University Microfilm

_____ (1986) *Negation in Japanese* Boreal Scholarly Publisher & Distributor

Mustafa, Zoraida (2002)『日本語とマレー語における否定表現の対照比較研究—マレーシア文学作品とその日本語翻訳を中心に—』広島大学修士論文

Fang, LiawYock & Hassan, Abdullah (1994) *Nahu Melayu Moden*（マレー語のモダン文法） Fajar Bakti Sdn.Bhd.

Omar, Asmah Haji (1992) *Bahasa dan Alam Pemikiran Melayu*(マレー語とマレー社会の思考） Dewan Bahasa & Pustaka

_____ (1980) *Nahu Melayu Mutakhir*(マレー語の新文法) Dewan Bahasa & Pustaka

_____ (1999) *Kamus Bahasa Melayu*(マレー語辞典) Fajar Bakti Sdn. Bhd.

Sudaryono (1993) *Negasi dalam Bahasa Indonesia: suatu tinjauan sintaktik dan semantik*（インドネシア語における否定：意味論，統語論） Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa